

韓国と日本:住まいの比較民俗学(2005年冬季比較民俗学会報告)

1. はじめに

今回の発表を始めるにあたって、私は、私自身がこの安東に近い醴泉郡の小さな村で行った調査を紹介したいと思います。

そして、その調査を手がかりとしながら、

- ① 韓国と日本の住居の構造の比較
- ② 伝統的な住み分けの論理の比較
- ③ 家の神と祖先祭祀
- ④ 住居と民俗の源流

という、4つの問題について考えてみたいと思います。

2. 醴泉郡の小さな村

私が、今から約15年前の1988年9月から1989年3月までの間に3回に分けて、醴泉郡の開浦面佳谷里という小さな村で民俗調査を行ったことがあります。当時はまだ学生だった金美栄さんも一緒でした。村の家は、セマウル運動の影響で、もうすっかり構造を変えていました。(村の様子 ph001)



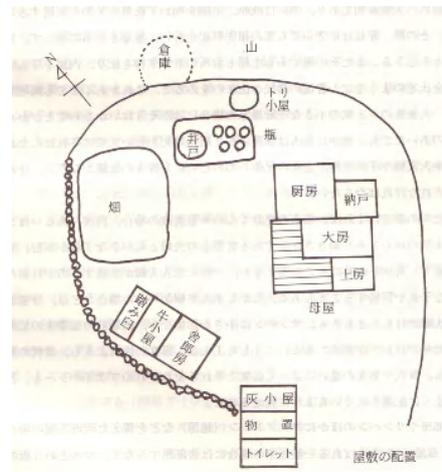
しかし、集落からすこし離れた山際に、私たちは一軒の美しい民家を見つけました。この家は、集落から孤立していたことに加えて、1930年頃に建てられた比較的新しい家であった為に、建て替えを必要としなかったようです。この家は佳谷里の隣の柳川面龍岩洞62番地にあり、の

主人は、金喆炯氏といます。(家の全体図・写真 ph002)



家は、大きく

①母屋、②舎郎房と牛小屋、③トイレと物置と灰小屋の3つの棟に分かれています。全体の見取り図は、このようになっています。(見取り図1 ph003)



入り口から入ったところが、
トイレと物置と灰小屋です。
(写真 ph004)



灰小屋には、いろいろな民
具が収められています。(民
具写真 ph005)

灰小屋の隣が、舎郎房で牛小屋と踏み臼が併設されています。(写真 ph006)



牛小屋には、秣を煮る釜が
あり、これがオンドルの焚
き口にもなっています。
(写真 ph007)

唐辛子を干しているマダンをはさんで、母屋があります。(写真 ph008)

これが、台所の入り口です。いろいろな道具が、整然と壁にかけられていますね。(写真 ph009)

台所には、竈があって、オンドルの焚き口になっています。(写真 ph010)



これが、内房の入り口です。(写真 ph011)



内房の中には、龍タンジと産神パガジが祀られています。(写真 ph012)



マルの天井には、梁の見える空間があり、ここには成主が祀られているといえます。(写真 ph013)

その他には、家の裏に基主を祀る甕が安置されています。(写真 ph014)



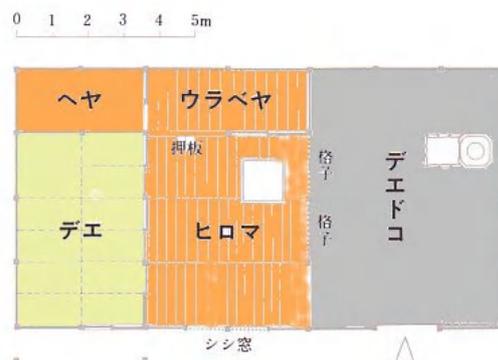
3. 韓国と日本の住まいの構造

この家を手がかりにして、まず住居の構造から見ていきましょう。

構造的に見ると韓国の家は、土間とオンドル部屋と板の間から成り立つといえるでしょう。土間である台所には竈があり、それに隣接してオンドル部屋があるという構造です。

日本の住居には、オンドル部屋はなく、土間と板の間と座敷から成り立っています。

(日本民家の写真 ph015)



オンドルを、果たして高床のヴァリエーションの一つと考えることができるかは、疑問ですが、韓国の伝統的な住居が、高床プラス土間を基本に出来上がっていることは間違いのないと思います。(オンドルの構造の写真 ph016)

そして韓国の土間にも、日本の土間にも竈があります。(土間と竈の写真 ph017)

ただし、韓国の土間は主として炊事のみ利用されますが、日本の土間は、炊事以外にも藁仕事や紙漉



きなどの様々の仕事をするスペースとして用いられ、韓国の場合よりも、はるかに広いのが特徴です。(日本の土間の写真 ph018)



日本の場合には、土間に隣接するスペースは、板の間であり、板の間には暖房施設としてイロリがあります。(日本の板の間とイロリの写真 ph019)

しかし、韓国の板の間である大庁は、しばしば庭に向かって開かれたオープンスペースですが、日本の伝統的な住居には、大庁のように庭に開かれたスペースはなく、全てが、板戸や外壁によって家屋のうちに閉じ込められた閉鎖的な空間になっています。(日本の外壁の写真 ph020)



日本の家屋には、土間に竈があり、さらに板の間にイロリがあります。イロリは、一般的には暖房用ですが、もちろん鍋をかけて、食事のための準備をすることも可能です。なぜ、一軒の家に2箇所の炉があるのか、まだよく分かっていません。これは面白い問題です。



4. 伝統的な住み分けの論理

つぎに、住居の住み分けの論理について、お話したいと思います。韓国の民俗学を研究する者なら、だれでも知っているように、韓国の家屋の住み分けの論理は、儒教的な「男女有別」の思想と長幼の序です。先に、私が紹介した醴泉の金喆炯氏の小さな家も、男の主人の支配する舎郎の空間と、女の主人の支配する内房の空間が、明確に区別されていました。これが、格式の高い両班の家であれば、もっと明確になり、世代別の空間の配置も明確になります。

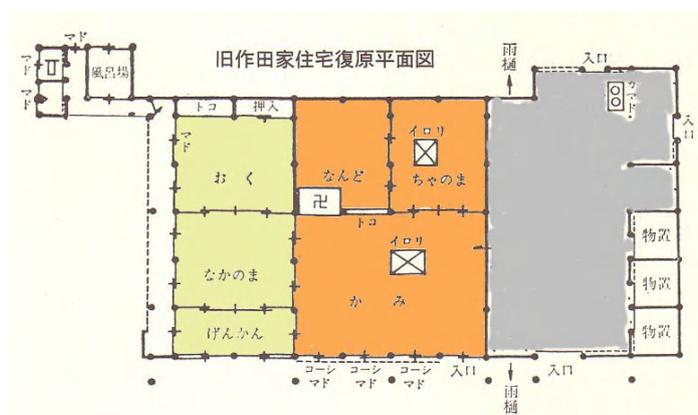


(両班家屋の写真と見取り図 ph021)

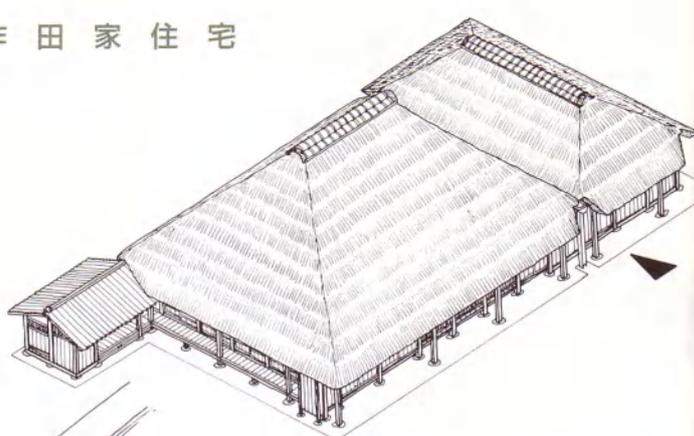
それでは、日本の家屋の住み分けの論理は、何でしょうか？私は、聖と俗、あるいは日常と非日常であろうかと思えます。かつて日本の住居は、座敷という非日常的な空間と、土間や板の間という日常的な暮らしに用いる空間が、明確に区別されていました。(日本の写真と見取り図 ph022)



たとえば、ここに紹介する家は、千葉県に非常に豊かな漁師の家ですが、広い土間と板の間があり、その奥に玄関、中の間、奥という座敷があります。座敷には、畳が敷かれ、風呂場と便所もあります。この家に暮らす人たちは、このスペースを使うことはありません。主人も含めて、家族はみな、板の間と土間のオープンスペースを使用して生活していました。(作田家の写真と見取り図 ph023)



作田家住宅

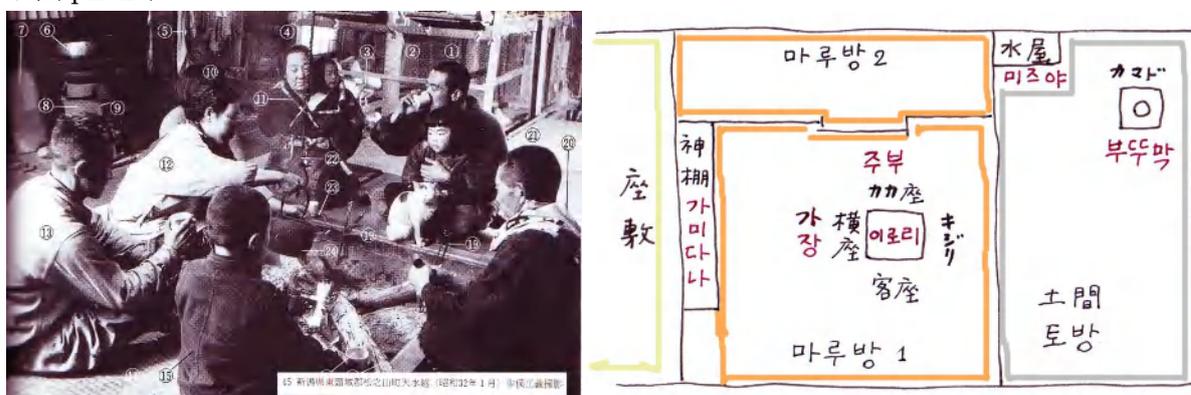


このことは、もっと庶民的な民家にも、共通して見られます。これは、私の住む神奈川県川崎市北部の民家で、17世紀末から18世紀初頭に建てられたと推定されます。やはり、広い土間と板の間を日常生活スペースとしていますが、デエと呼ばれる座敷の後ろに、ヘヤ

が配置されています。このへやは、通常「納戸」と呼ばれる寝室と穀物収納と物置をかねたスペースで、出産の時にも使われました。

この寝室には、「男女有別」や「長幼の序」に基づく住み分けはなく、むしろ出産などの、折々の必要に応じて使用されていたと思われます。(清宮家の写真と見取り図 ph024)

それでは、日本の住居に「男女有別」や「長幼の序」の秩序が、まったく無かったかというところ、そうではありません。その役割を果たしたのはイロリです。イロリには、男の主人が座る「横座」と女の主人が座る「カカ座」が決められていました。横座は、土間に面し、神棚などの神聖な空間を背後にしています。カカ座は、土間から見て右手で、水屋という炊事場を背後にしています。土間から見て左側の主人の隣の席が「客座」で、主人の正面の土間よりが「キジリ」という、薪の焚き口で、通常は嫁の席です。(イロリの写真と見取り図 ph025)



これと同じように、韓国の家屋の場合にも、祖先祭祀を行い、ソングジュ神を祀る大庁や、来客を迎える舎郎房は、非日常的な役割を帯びた空間であり、日常生活の場とは違った性格を帯びています。(舎郎棟の大庁の写真 ph026)



5. 家の神と祖先祭祀

周知のように、韓国の家屋の祭祀は、男性を中心にして行う祖先祭祀と、女性を中心にして

行う家の神（家神）の祭祀の2つに分かれます。

祖先祭祀に関しては、多くの研究があり、よく知られているので、ここでは家の神の祭祀について考えてみたいと思います。

金喆炯氏の家には、内房には龍タンジと産神パガジ、大庁の梁には成主、家の裏には基主の甕が祀られていました。(写真 ph027)

韓国の家の神には、この外にも台所の竈の神である竈王、厠の神、家の財産や福を司る業神などがあり、各地方によって名前や祭り方は違いますが、すべて主婦が祭主となります。

韓国と同じように、日本の家にも、様々の家の神が祭られています。



台所の火を守る竈神や火伏せの札。水を守る水神様の札。

もっともよく知られているのは、東北地方の竈神ですが、火の神は、全国の家庭で祀られています。(写真 ph028)

日常生活をおくるイロリのある部屋には、神棚と歳棚があつて、さまざまの神が祀られています。

神棚の祭神は、神道の影響から、アマテラスオオミカミなどが主流ですが、同時にエビスやダイコクという福の神も祀られています。

歳棚は、正月の神を迎えるための棚で、正月以外には祭神はなく、空っぽです。

(太田家の写真 ph029)

板の間の奥や座敷には、仏壇があります。仏壇には、祖霊を祀ります、韓国の秋夕にあたるお盆には、祖霊が家にもどってくるので、盆棚を作り



ます。(写真 ph030)

日本の場合は、神棚や歳棚に向かって祭祀をするのは男で、特に正月の場合は、歳神に捧げる料理もすべて男が行う場合があります。



しかし、時には、女が祭主を勤める場合もあります。

特に、沖縄では、これが明確で、共同体の祭りも、女が主催することが多いのです。



とくに、火の神は、女が守る神で、結婚する時にも、自分の火の神を婚家にもっていきます。(写真 ph035)

柳田國男以来の日本の民俗学は、日本の信仰や祭祀の原点を沖縄にもとめ、日本の祭祀の司祭は、本来は女性であったと考えてきました。

日本の昔話にも、年越しの晩にイロリの火を守る女を主人公とした「大歳の火」という話があります。

日本の祭りが、果たして女性によって司祭されてきたのかどうかは、まだ結論は出せませんが、日本の民俗学者が、家の神を守る韓国の女性の民俗を見ると、たいへん大きな共感を覚えるのは、確かなことです。

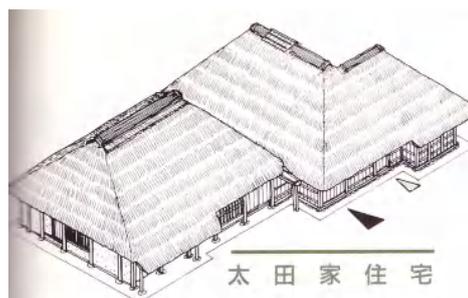
6. 住居と民俗の源流をたどる

最後に、韓国と日本の住居と民俗を比較し、その源流を辿って見ましょう。

構造的に考えると、まず韓日に共通するのは、土間と高床です。

韓国では、この土間と板の間の上にオンドル部屋を設け、日本では板の間の奥に畳を敷いて座敷を作りました。

オンドルの起源については諸説ありますが、高句麗起源で、それが16、17世紀くらいに全国に普及したものと考えられます。いずれにせよ、オンドルは、竈を熱源とするために、土間と板の間に位置し、高床と組み合わせられるようになったのだと思います。



日本の場合も、土間と高床の組み合わせに関しては諸説あり、簡単には結論できませんが、土間と高床が2つに分かれた分棟型という、興味深いタイプの住居があります。

先ほど紹介した千葉県の作田家と茨城県の太田家です。(作田家と太田家の見取り図と写真 ph036)



分棟の雨樋
(柱と柱との間に取り付けられた木製の雨樋)

分棟型の家屋では、高床部分と土間の部分に分かれて、二つの独立した屋根を太い雨樋が繋ぎ、二つの屋根から滴る雨水を受け止めています。ph037

作田家の場合も、太田家の場合も、まずイロリを中心とした高床の部分があり、そこに新しく竈を中心とした土間が付け足されたことが分かっています。



しかし、だからといって土間や竈が、高床より新しいと結論することはできないと思います。

高床は、誰もが認めるとおり、高温で多湿な東南アジアから中国にかけての家屋の形式が、韓国や日本に伝えられたものです。

これは、中国の雲南省に住むアカ族の村と高床の家屋です。日本の家とたいへんよく似ています。ph038



アカ族の入母屋造りも高床式の母屋と露台

これは、カレン族の高床住居とイロリと火棚です。ph039

床下からもイロリの構造が見えます。ph040



竹製の床に切った竈と薪を干す火棚

ラフ族の家の建て方を見てみましょう。

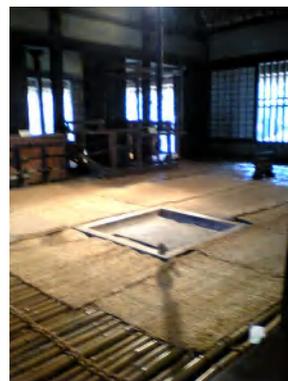
ph041



垂木は地床の上で交叉し、藁竹に突きさされてぶらさがる

いずれの場合も、床には板を敷かず。竹を用いています。板は、今でこそ簡単に手に入る建築資材ですが、かつては高価なものでした。

日本の場合にも、豊富な竹を使って床を作り、イロリを切った家が見られます。冬は、床下から風が入り、かなり寒かっただろうと思います。ph042



土間に箆をしいて、そのままイロリを作った例も見られます。

こうして見ると、日本の高床とイロリは、ワンセットで東南アジア・中国から伝えられたと考えられます。

日本の文化人類学者の杉本尚次氏によれば、韓国でも、かつてはプオクに隣接するチョンジュカンにはイロリがあったといいますから、かつては韓国にも高床とともにイロリが伝えられたことがあったのかもしれませんが。

高床には、もちろん、まったくイロリのような火とは関係の無い高床も存在します。たとえば、日本の奄美や沖縄に多く見られる高倉が、そのよい例です。ph044



構造ばかりではなく、家の神に関しても、日本と韓国、そして東南アジアの少数民族の間には、多くの共通点が見られますから、住居の起源の問題は、さらに複雑で精緻な議論を必要とするでしょう。しかし、今回は、家の神をまつる祭司が女性であるということに限って、かなり詳しく報告したので、この辺でやめておきます。家の神の存在は、家の中に聖なる空間と俗なる空間の区別を生み出しますから、当然、住居空間の住み分けという問題を引き起こします。この問題も、今回の短い発表のなかで十分に展開するのは難しいので、問題の提起だけにとどめておきたいと思います。